

「大地震暦年考」の元禄地震記事について

幕末の安政2年（1855）10月2日の夜、江戸を中心として関東平野の各地に大きな被害をもたらした「安政江戸地震」は、プレート内地震、いわゆる直下型地震の規模の大きなものであった。江戸では本所、深川、浅草、下谷などの現在の下町地区と、小石川、小川町、日比谷など、江戸城の東と北に隣接する地域で被害が大きかった。死者はおよそ1万人であったと推定されている。海溝型プレート間地震であった元禄地震（1703）と大正関東地震（1923）と合わせて、1603年の江戸開府以来現在までの400年間に江戸・東京を襲った3大地震の一つである。

この安政江戸地震の直後、わずか2、3ヶ月の間に、鯉絵と呼ばれる一枚刷りの瓦版形式の出版物が爆発的に発行された。地震の神とされる鹿島明神が、要石（かなめいし）によって鯉を押さえるという図柄を基本としている。これとは別に、江戸の知識人たちによって地震という現象を様々に論じた冊子が刊行された。服部保徳の『安政見聞録』、仮名垣魯文の『安政見聞誌』、宮崎成身の『視聴草（みききぐさ）』、齋藤月岑（げっしん）の『武江地動之記』などがその代表的なものである。今回取り上げた『大地震暦年考』もこのような冊子の一つである。

この冊子は、安政江戸地震発生翌年・安政3年（1856）に山崎久作によって編集されたもので、日本橋博正（くれまさ）町の石坂甚十郎が版元になっている。最初に北峯閑人の「地震弁説」、菱淵某による「地震西洋の弁」、潮田某による「地震前知の弁」の各章が置かれ、有識者による地震に関する一般理論が展開されている。そのあと、「元禄癸未大地震の古図」、「伊太利亜（イタリア）国地震の図」、「震雷よけ殿造（とのづくり）の細図」、「農家雷風よけの図」、「洪浪あげ引きの図」、「文政十一年越後国大地震書簡の写し」、「天武天皇代より安政二年迄地震雷水津波の事」の章が続いている。この章立てからみると、地震の事例を、我が国の過去の歴史だけでなく、外国の例をも紹介し、さらに耐震・耐雷を考えた建造物の考察、それに雷や風など地震以外の自然災害にも対策を考慮するという、広く民衆への啓蒙という使命を意識した刊行物になっている。

右の絵図は、「元禄癸未大地震の古図」の章であって、大正関東震災と同じく海溝型巨大地震であった元禄16年（1703）11月23日の午前3時頃に起きた「元禄地震」の事を伝える絵入りの原古文書を復刻したものである。原文書の破損の部分はそのまま忠実に再現して版本化されている。

では、そこに書かれた文章を読んでみよう。「十一月廿二日、宵より電（いなづま）強く、夜八時（午

前2時）地鳴る事、雷の如く、大地震、戸障子倒れ家は小船の浪に動くがごとく。地二三寸より所により五六尺ほどわれ、砂をもみあげあるひハ水を吹き出したる所もあり。石垣くづれ、家蔵つぶれ、穴蔵ゆりあげ死人おびただしく、なきさけぶこえ街（まち）に。又所々くづれたる家より失火あり。八時すぎ津浪ありて、房総人馬多く死す。内川一はい（いっばい）さし戻る四度あり。此時より数度の地震あり。相州小田原ハわけておびただしく口のもの凡二千三百人。小田原より品川まで壹万五千人。駿州十万人、江戸三万七千余人。（以下小字）内廿九日火災のとき両国橋にて死するもの七百三十九人。（以下大字に戻る）この時三十三間堂くつがえる。廿四日夜より雨ふり明（あけ）がたにおよびてゆり止む（以下和歌）。

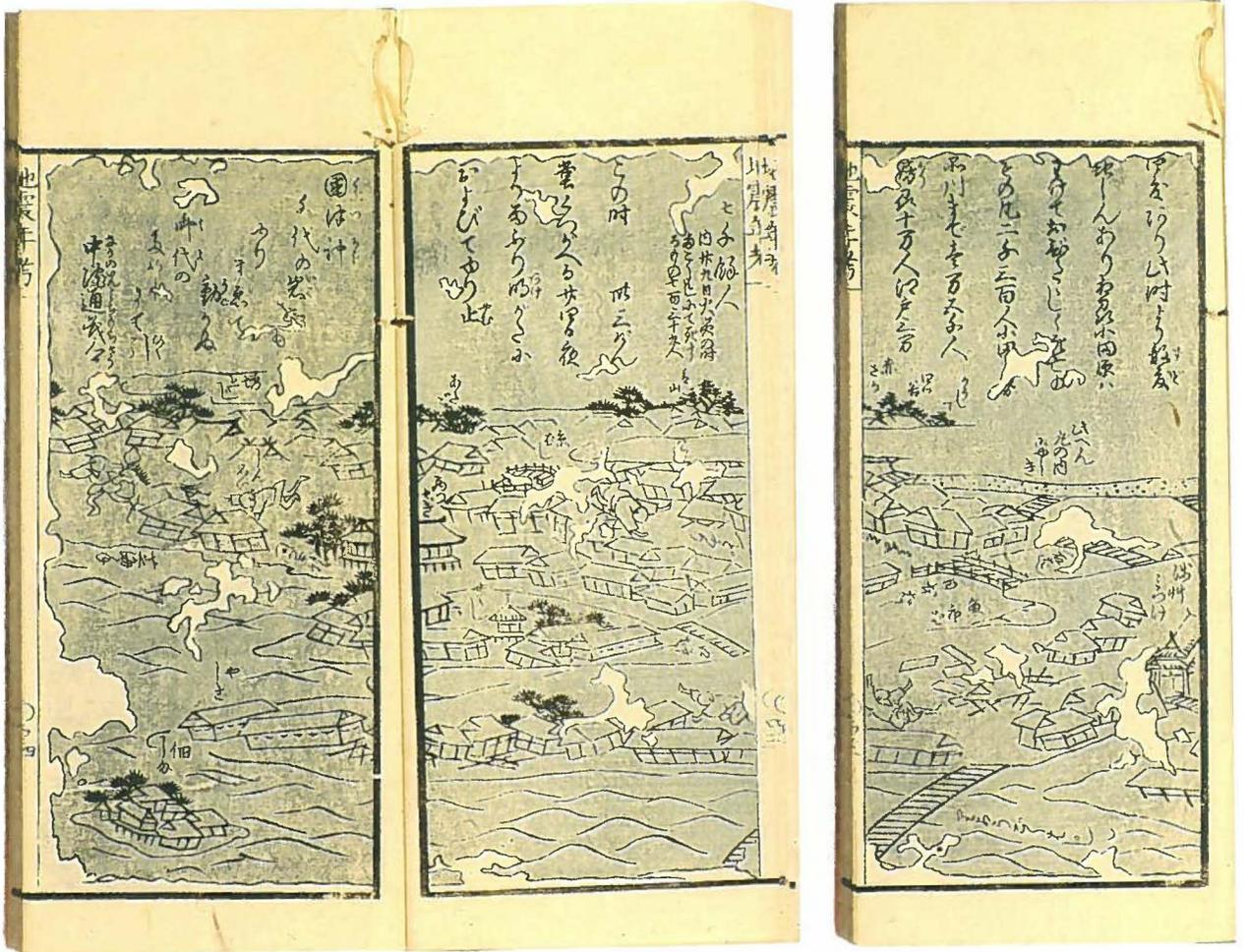
現在語に近いのでほとんど理解できるであろう。本震は23日の午前2時頃起きたが、前夜、稲光が強かった、という記事は前兆現象の記載として注目値する。液状化が起きたのであろう、地割れを生じて地中から砂や水の吹き出しがあった。地震のあと津波があり、江戸市中の川が両岸いっばいの高さまで溢れ、引いては又溢れることを4回繰り返した。小田原が特に地震の被害が大きく2,300人の死者を数えた。地震の6日後の29日には火災を生じ、両国橋のところで739人が死んだというのは大正関東震災の被服廠へ逃げ込んだ群衆が火災に行く手を阻まれて大量死を生じた事故を連想させる。

この文の最後に記された三十三間堂というのは、江戸深川の富岡八幡宮に隣接して、京都の三十三間堂に模して建てられた南北六十六間・東西四間の堂舎で、京都のそれと同じように通し矢の行事が行われていた。この三十三間堂も転倒したというのである。

その下に描かれた絵には、転倒した家屋がたくさん描かれているが、1ページ目下の方に「かんおん」と書かれた建物は倒れていないことに注意したい。浅草寺の観音堂は自然堤防の上に立っていたためか無事だったのである。また2ページ目の右端は小川町、左側には「この辺丸の内」とあって、この間は砂の帯で結ばれている。この間で液状化が激しかったことを表しているであろう。3ページ目は「青山」、「あたご山」、「増上寺」の注記があるが、このページに描かれた家屋は前の2ページのそれより被害の程度が少ない。現在の港区に相当するが、ここは地盤が比較的強く、小さい被害程度で済んだのであろう。

「大地震暦年考」の記述と挿絵をよく見れば、事実

に忠実に描かれたものであることが了解される。



大地震暦年考(防災専門図書館蔵)の「元禄地震」絵図

光緒十六年十月

大地震の圖

豫州

十一月廿二日震より電報

夜八時頃震る中電報

大北者大津子磁と云

大津の津く動くらま



ひ二ムすより雨より

五六尺やどりし砂と

ゆきあけあけひ水と

ゆきあけあけひ水と

石垣もと散る

是光あけりあけ



雨人おひ

まけよと名徳

又あくるまは

大あひ八時

あけて崩れ人

あけて崩れ人

